
間違え電話

藍氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間違え電話

【Nコード】

N4947Q

【作者名】

藍氷

【あらすじ】

心臓病の真鍋栞は年末の診察の予約を取ろうと電話をかけるが、電話番号を間違え、極道一家の荒川家に電話をしてしまう。その電話を手にとったのは1人息子の尋だった。その日を境にたびたびかかる栞からの電話。——オリジナルの切ない恋愛系の話です！

Re:1

20××年12月3日。

高校生も中学生も
受験やら試験やらで大変なこの時期。

高校3年の尋《じん》の家は
古びれた極道系一家で
大学には進級させず家を継がせる気だ。

「尋。お前は若頭としてこの家を継げ」と、父。

「尋さん！俺たち1生尋さんについていきやす！と、父の舎弟たち。」

「ウチの子も、こないに大きゅうなったなあ〜」

と、母。

尋はイラついていた。

でも尋にはやりたいことなんて、なかった。

ただ、自分の運命を定められてるのが気に食わなかった。

そんなイラついてるなか1本の電話が鳴り響いた。

ジリリリ・・・

その電話に気づいた尋は思わず電話に近づいた。

「あつ！尋さん！自分が・・・」

近くにいた舎弟が呼び止めたが、無視して電話を手を取った。

ガチャ。

肺の中の空気を思いつきり吐き出すように、

「うるせえーんだよ！！！！誰だてめえ！！！！！」

「きゃっ！」

電話の相手は女らしい。

「何の用だ！！！！！」

「ふ・・・え・・・あ・・・ごめんなさい・・・

電話番号・・・間違えまし・・・た・・・」

涙声の女学生の声、だった。

「ビビッてんじゃねえーよ！！！！！」

モゴモゴ喋んなー！！！！はつきり喋れ！！！！！」

「っ！！・・・う・・・ごめんなさい・・・」

「ちっ！」

「っ・・・はあはあ・・・」

「・・・？」

「ゴホゴホ」

突然相手が咳き込みだした。

「おい？どーしたんだよ？」

「ゴホッ！・・・いえ・・・なんでもないです・・・」

それから相手が落ち着くのを待ち

「ふう・・・すいません。間違えてかけてしまいました。

・・・失礼します」

「・・・おう」

尋が受話器を置くと

また電話が鳴り響く。

その場にいたのでまた尋が受話器をとる。

「あっ。×総合大病院ですか？私そちらでお世話になってる
真鍋栞ですが・・・」

「・・・」

「・・・あの・・・？」

「バカか？」

「！」

「また間違えてんぞ」

けらけらと笑う尋。

「・・・！！」

声に気づく栞という女学生。

「く・・・っはは」

「あ、あのっ！えっと・・・その・・・」

「病院だろ？番号言ってみ？」

「あ・・・0×0・・・」

「ちゃんと覚えてかけな」

「・・・ハイ・・・すいません」

「じゃあな」

受話器を戻そうとすると、

「あの!!」

耳にあて直し、

「なんだよ？」

「私だけ名乗って・・・個人情報バレたらどうしてくれるんですか
!？」

「自分から名乗ったんだろ？ 栞ちゃん」

「!!」

「別に個人情報流そうなんて思ってたねえーし・・・」

「っっ!!」

「・・・荒川尋」

「!!」

「名乗ったけど」

「・・・」

「荒川」という苗字はここの辺では珍しく、
有名な極道一家として通ってきてる。

きつと栞という女も怖くなったのだろう。

名乗ってから黙り込んでしまった。

「荒川・・・」

「・・・」

しかし、彼女は違った。

「珍しい名前ですね!!」

「!？」

「あゝすつきり。じゃ、これで。あっ！

個人情報流したら私も荒川さんの流しますから!!」

「・・・好きにしる」

ガチャ！

尋は勢いよく受話器を置いた。

舎弟が大事な取引先ではないのか心配になり、

父親を呼んできた。

「尋。今の電話の相手は誰だったんだ」

「・・・別に。てめえにも俺にも関係ない。間違え電話だ」

Re:2

20××年1月5日。

尋は。×総合大学病院にいた。

大きなホールの待合室のソファを2人分使って座っていた。

その姿をみんなは見えて見ぬふりをしていた。

おばあさんも妊婦さんも成人男性も。

尋は不良の定番の茶髪にピアス、シャツのボタンは3つくらい空けていて

中には黒いTシャツが見えていた。

だからみんな注意したくてもできなかった。

そもそもなぜ尋が病院なんかにいるかというと、

あの栞とか言う超絶おバカっこに

会いにきたからだ。

この前は名前が知らないですんだけど、

今回はそうはさせない。

俺だって家は嫌いだが、なめられっぱなしは嫌だ。

俺という存在を見せ付けてやる。

そんな思いでここに来たが、その先の事も、

この意地の事もよく解んなかった。

いわば、ただの思いつき。

栞は苛立っていた。

何も言わない周りの人にもだが

1番腹を立たせた人物。

その茶髪ピアスの前まで歩いて行って言ってる。

そう、私は正しいことを今からする。

何も間違っていない。

確信を持って栞は茶髪ピアスの前に立つ。

「・・・」

目の前にセミロングくらいの髪をした

高校生くらいの女が立っていた。

その女は自分のことをキツと睨みつけてきている。

「んだよ？なんか用でもあんのか？チビ！！」

「あんたの・・・」

「？」

「あんたのせいで座れない人がいるのよ！！！！！！！！！！」

「！！！！？」

いきなり怒鳴られ動揺する。

周りも恐る恐る見守るが思わず拍手する人も。

「だからちゃんと縮こまって座れ！！！！！！！！！！」

今度はひるまない。

「てめえの声はもつと迷惑だろうが！！！！！！」

と、言いつつも自分も声がでかくなる。

「何よ！！あんた見たところどこも悪そうに見えないんですけどー

！！！！！！？」

「てめえだつて怒鳴る元気あんじゃないか！……！」

「だって誰もあんたの事注意しないんだもん！……！」

「お前が1番浮いてるんだよ！……！」

ギヤーギヤー言っているうちに病院の警備員さんが来てしまった。

「おい！君！……何やってるんだね！？」

栞と尋の間に立ち、尋をおさえる。

栞は看護婦さんにおさえられている。

お互い縄張りを争う猫のように見えた。

しかし、その時。

栞が胸を押さえて急に倒れた。

「栞ちゃん！？しっかりして……！」

看護婦さんが栞の名前を呼ぶ。

しかし栞は青い顔をしてうずくまるだけだった。

『しおり？どつかで聞いたことにある名前だな？』

そう思いつつも警備員の腕を振り払い女の顔を覗き込む。

すると医師が来て少し下がっててと言われる。

「真鍋さん？聞こえますか？今から手術室行くからね？」

聞こえたら右手上げて？」

『真鍋……栞……！』

尋の中でのパズルが組み合わさり、この女があ電話の相手だと解った。

そう思ったのもつかの間、

尋は警備員に「ちょっと事情を聞かせてもらつよ」と

入り口近くにある事務室に連れて行かれた。

Re:3

事務室で警備員の男にあの女のことについて聞いた。
どうやら心臓病らしい。

「君が栞ちゃんをびつくりさせるようなことしたんじゃないの?」

「んな事してねえよ。」

「・・・ふう。じゃあほんとに初対面?」

「まあな。」

「・・・あの子の癖か・・・」

警備員の男は少しあきれて頭を抑えていった。

「・・・癖?」

「あの子は正義感が強すぎなんだ。そこらへんの交番の警官よりも、私よりも。」

「うざぞ」

「本当にいい子すぎて困るよ」

「・・・もう帰っていい?」

「ああ。じゃあ外まで送るよ」
そう言って2人は立ち上がった。

出口に向かって歩いていたら
あの女にあった。

「あ！佐々木さん！」

「栞ちゃん！もう体は大丈夫なのかい？」

「あつ！さっきは迷惑をかけました」

「はあー。よかった」

「・・・」

「・・・」

ふと栞は尋のことを見つめる。

尋も黙って栞を見つめる。

「あー・・・栞ちゃん？もうこの子には注意したからね？」

「・・・そうですか。じゃあ失礼します。」

そういつて栞は行ってしまった。

「・・・」

尋は黙って栞の後を追う。

「あ！ちよつ！喧嘩はしないでよ！」

そう警備員の男に釘を刺される。

その言葉に尋は振り向かず、手を3回ふり答えた。

栞は気にしないようにしてた。

自分でも解っていた。

興奮や軽い運動をすると心臓に負担がかかり
発作が起こる。

なので平常心で自分の後ろ約3mをくつついてくる
茶髪をどう追い払おうか考えていた。

尋は解らなかった。

意味もなく真鍋栞の後を追いかけている。

コレで話しかけられたらどう答えたらいいのだろう。
とりあえず栞は駅に向かって歩いてるので

電車で帰るとでも言い訳しよう。

そうやって話す内容を考えていた。

痺れを切らした栞は振り返りこういった。

「この・・・ストーリーカー！」

大声でなかったのは助かった。

あと周りに人がいなかったことも。

だけどその言葉にはシヨックを覚えた。

「なッ！？てってめえ！！」

シヨックすぎて今まで考えていた話す内容が吹っ飛んだ。

「何でついてくるのよ」

「な、それは・・・電車で帰るからだっ！」

それだけは残っていた。

「っっ！」

納得してしまった。

確かにこの道は駅へ向かう道だった。

悔しそうな顔をして勢いよく前を向き

今度は少し早歩きで歩き始めた。

尋はこの機会が話すきっかけだと思い
栞との距離を縮めた。

何でこんなことになってしまったのだろう。

電車の中では2人肩を並べて座っていた。

「栞はドコで降りんだよ？」

「渋谷」

何でこいつは人に名前を知っている？

しかも下の名前でなれなれしく呼びやがって。

そう思いながらも答えた。

「・・・ふーん」

「あなたは？」

「俺もそこ」

「！」

苦虫を噛み潰したような顔をして

栞は下を向いた。

「あんた私に合わせてないよね？」

「・・・別に」

その態度がすぐくむかついたので

それ以上は喋らないようにした。

渋谷について

栞と分かれることになった。

それ以上ついていったらほんとにストーカーに見られるし。歩き始めたとき栞に聞かれた。

「私の名前知つといて個人情報流すつもりなんでしょう？」

「・・・」

『またそれかよ』と思いながら

「俺そんなにPCつかわねえし」

「・・・あんたの名前教えなさいよ」

「・・・もう知つてると思うんだけどなあ」

と、上から目線で話す。

「知つてるわけじゃない。今日はじめて会ったんだから」

「荒川 尋」

「あ！」

ケラケラ笑つて尋は走つていつてしまった。

「電話の・・・」

栞は1人ぼつんと立って考えた。

あの「荒川」だったとは。

栞はもう尋とは出会わないことを願った。

もう

その世界は見たくなかった。

Re:4

家に帰ると

栞の母は夕飯を作っていた。

栞の好物のシチューを。

「お母さん、私これからしばらくまた病院のお世話になるみたい」

「・・・そう。・・・ごはん、もうすぐでできるから」

「うん。部屋で宿題してるね」

そういつて栞は2階の自室へと階段をかけていった。

部屋の扉をあけ

電気をつけずベツトの中に埋もれた。

年明けでもまだまだ肌寒いので毛布の中につずくまる。

『今日はすくし疲れたな』

《荒川》という名前はよく知っていた。

なぜなら自分をもっとも助けたかった人だから。

20××年 8月 17日

栞は中学2年だった。

エアコンが壊れていて

熱くてセミの泣く声がつつとうしくて

一匹残らず殺してやろうという殺意まで浮かんた。

窓から見える空も澄んでいる蒼のはずなのに太陽のせいで黄色く見えた。

どんな光景を見てもイラついた。

腰あたりまである長い髪は金色だった。

服装は下は黒いジャージで裾をまくってる。

上は白いタンクトップ。

この格好がこのごろ一番涼しいことに気づいた。

中庭が見える窓を全開にして

少しでも風が吹いてくれることを願った。

父は会社に行っていて

母は電気屋に行ってしまった。

私は部屋から出たくなかったから家で留守番。

『そついえば冷蔵庫にアイスがあったけ』

『長い髪もうつとうしく思えたし』

頭の高いところで縛ってお団子にしよう』

そんなことを思いながら冷蔵庫を覗いた。

アイスはなかったが冷凍みかんはあった。

みかんを2つ持って縁側に戻る。

扇風機の風は生ぬるくて仕方なかった。

「栞ちゃん」

不意に聞こえた隣のおばあちゃんの声。

向かいの塀からこつちに顔を覗かしている。

「まあ髪束ねたのお？可愛いわあ」

「どーしたの？」

「さつき里恵さんから電話があつてねえ」

里恵とは母の事だ。

「お母さんがどーしたの」

「聞けば栞ちゃん家、エアコン壊れたんでしょ？」

私の家おいで。そうめん作つたわよお」

「・・・」

「ほら、早く」

手招きをしているおばあちゃんの顔は笑っていた。

私は金髪でちよつと柄の悪い格好をしてるのに。

「うん」

栞は立ち上がり玄関に向かった。

『こんな私でもおばあちゃんの楽しみになれるなら』

そう思つて、栞はサンダルを履きながら笑みを浮かべていた。

冷凍みかんを両手で持ちながら向かいのおばあちゃんの中庭に向かっていった。

「はい、いらつしゃーい」

そうついいながら出されたそうめんが入ったお皿。きれいに1つ1つ丸く巻いてとりやすくされていた。

「みかん・・・」

「んー？あら、冷凍みかん？そうめん食べたら食べましょ」
「うん」

おばあちゃんの家は扇風機が回っていて自分の家よりかは少しはマシだった。

「ごめんなさいねえ、私の家もクーラーは効かなくて・・・」

「ううん、大丈夫」

そうめんをすすりながら梨は言う。

「・・・そうだ」

「？」

「今度の日曜に縁日があるんだったわ」

「縁日？」

「お祭りの事よ」

「ああ」

近所の神社のお祭りの事だった。

「浴衣があるからそれを着て行きなさいな」

おばあちゃんが手を合わせながら言う。

「でも・・・」

栞は少々引きこもり気味だった。

心臓病のせいで、できることは限られてくるからであった

「栞ちゃんのこの髪の色なら・・・」

立ち上がり、奥の部屋にいつてしまったおばあちゃんを目で追いつめんが少し入ってるお皿に目を落とす。

しばらくしておばあちゃんが戻ってきた。

「ほら、今の栞ちゃんにはこの青い浴衣が良いと思うの」

きれいにたたまれていた浴衣を栞の前に持ってくる。

水をイメージしたかのような丸い円の刺繍がいくつもある。

「・・・」

「どう？きれいでしょ？」

ニコニコと笑いながら栞の顔を覗く。

「・・・うん、きれい」

「でもね、ホントは黒い髪ならもっと似合う浴衣があるのよ」

「え？」

おばあちゃんは栞の頭をなでて

「髪の毛、傷ついちゃうわよ・・・せっかくきれいな黒髪だったのに・・・」

「・・・」

確かにここ最近髪の毛が絡まりやすいし枝毛も多くなってた。

「そうだね」

「でも今の髪も似合うわねえ」

「？」

「栞ちゃん可愛いから外国人さんみたいよ」
頭をなでていた栞のほっぺたに移された。

「・・・みかん」

「ああ、そうね。みかんも食べましょ」

おばあちゃんがまた立ち上がり今度は台所へと向かう。
栞は自分の前髪をつまみ見つめる。

「・・・」

「はい、みかん」

不意に視界に入ってきたみかん。

そのみかんはちょうどいい冷たさで
すごくおいしかった。

「おばあさん、里恵ですー」

母が帰ってきたのは夕方の17:00くらい。

「あら、里恵さん、お帰りなさい」

「どうもすいません。栞がお世話になりました」

「いいのよ。栞ちゃん、とてもいい子だから」

玄関先でそんな話をしている2人。

「ん・・・お母さん・・・」

部屋の門から栞が顔を覗かせる。

「あ、栞。帰るわよ」

「うん」

そう言つて栞は中庭にある自分のサンダルを取つてきて玄関で履いた。

「おばあちゃん、そうめんありがとう」

「いいのよ。あ、そうだね、里恵さん」

「はい、何でしょう？」

「今度の日曜は縁日でしょう？栞ちゃんに浴衣を着せてあげたいんだけど・・・」

「まあ、ありがとうございます。そうですね・・・人が少ない夕方あたりなら行けそうです」

人ごみに行くとはぐれて発作が起きたりしたら手当てができないからだ。

「解つたわ。じゃあ栞ちゃん、待っているからね」

「うん」

「じゃあ、また日曜日によろしくお願いします」

「それじゃまたね、栞ちゃん」

「ん」

短く答えて母よりも早くかけて行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4947q/>

間違い電話

2011年3月21日02時41分発行